

福岡市早良区

原 遺 跡 7

—第16次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財報告書 第337集

1993

福岡市教育委員会

Hara

原 遺 跡 7

—第16次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第337集



調査番号 9103
遺跡略号 HAA16

1993

福岡市教育委員会

序

福岡市早良区、西区を中心とした早良平野は古くから人々の生活が営まれ、先人たちの残した文化遺産も、国指定史跡古武遺跡群、野方遺跡群をはじめとして、数多く発見されています。

またこの地域は福岡市都市圏に近く、住宅地として目覚ましく発展しています。福岡市教育委員会では、これら住宅建設を初めとした開発工事に対しては、埋蔵文化財についての事前調査を行ない、やむをえず破壊される遺跡については、記録保存に努めているところあります。

今回報告する原遺跡は、寺院建設に先立って調査を行なったものです。調査の結果弥生時代から近世にかけての多くの遺構、遺物が発見されました。本書が、文化財に対する認識と理解、さらには学術研究に役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しまして、土地所有者の方々を初め、多くの皆様のご協力とご理解を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1991年4月15日から5月14日にかけて調査を実施した、寺院建設に伴う原遺跡群の第16次調査の調査報告書である。
2. 検出遺構については、調査時には、遺構を示す記号Mを付し検出順にM1から通し番号を付した。本書では、この番号からMをのぞき、遺構の性格を示す用語を付して住居跡1、土壙2のように記述する。なお本書で使用する方位は磁北である。
3. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、井上靖崇、清水文代、杉村文子、吉岡員代が、遺物実測図は宮井、熊塙御堂和香子がそれぞれ作成した。製図は宮井、熊塙御堂が行ない、林由紀子が補佐した。また写真撮影は宮井が行なった。
4. 本調査にかかる遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。
5. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

遺跡調査番号	9103		遺跡番号	HAA-16	
調査地地番	福岡市早良区6丁目13-41		分布地図番号	082-A-2	
開発面積	1533.7m ²	調査対象面積	207m ²	調査面積	167m ²
調査期間	1991年4月15日～5月14日	事前審査番号	2-2-366		

本文目次

I	はじめに.....	1
1	調査による経過.....	1
2	調査組織.....	1
II	位置と歴史的環境.....	1
III	調査の記録.....	3
1	概要.....	3
2	弥生時代、古墳時代の調査.....	3
3	中世、近世の調査.....	9
4	まとめ.....	14

挿図目次

Fig. 1	原遺跡群調査地点図 (S = 1:6000)	2
Fig. 2	遺構配置図 (S = 1:100)	4
Fig. 3	弥生時代、古墳時代遺構実測図 (S = 1:40)	5
Fig. 4	弥生時代遺構実測図 (S = 1:40)	6
Fig. 5	弥生時代、古墳時代遺物実測図 (S = 1:3)	7
Fig. 6	弥生時代遺物実測図 (S = 1:3, 1:2)	8
Fig. 7	掘立柱建物配置図 (S = 1:100)	10
Fig. 8	中世遺構実測図 (S = 1:40)	11
Fig. 9	中世遺物実測図(1) (S = 1:3, 1:2)	13
Fig. 10	中世遺物実測図(2) (S = 1:3, 1:2)	14
Fig. 11	原12次、16次、中世遺構配置図 (S = 1:600)	16

図版目次

PL.1	調査区全景	18
PL.2	(1)住居跡30 (北から)	19
	(2)住居跡75 (西から)	19
PL.3	(1)貯藏穴15 (西から)	20
	(2)貯藏穴18 (西から)	20
PL.4	(1)貯藏穴25 (北から)	21
	(2)貯藏穴47 (東から)	21
PL.5	(1)土壇29 (南から)	22
	(2)井戸70 (東から)	22
PL.6	(1)2号掘立柱建物 ピット62 (東から)	23
	(2)3号掘立柱建物 ピット107 (東から)	23
PL.7	掘立柱建物群 (西から)	24

I はじめに

1 調査に至る経過

1990年12月28日付で、宗教法人医王山宝樹院から福岡市早良区原6丁目13-41地内における寺院本堂改築に伴う埋蔵文化財の事前審査願が、教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が原遺跡群内に位置し、既調査地点と近いことから、試掘調査が必要と判断し、1991年1月17日に試掘調査を行なった。その結果弥生時代～中世にわたる遺構が遺存していることが判明した。この結果をもとに申請者と協議を重ね、工事によって破壊を免れない部分については、発掘調査を行ない記録保存の措置を講じることになった。

申請者である宝樹院の方々には、調査期間を通じて、各方面にわたり多大なご協力を賜った。また調査後には、寺院の沿革について有益なご教示を賜った。また、工事担当の大喜工務店には、条件整備でご配慮いただいたばかりでなく、調査地内の地質データを提供していただいた。記して感謝申し上げる次第である。

2 調査組織

調査委託：宗教法人宝樹院

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾 学 埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄

調査事務：埋蔵文化財第1係 中山昭則 吉田麻由美 寺崎幸男

試掘調査：横山邦雄 加藤良彦

調査担当：埋蔵文化財第1係 宮井善朗

調査作業：太田孝房 平田信吉 吉岡清巳 井上靖崇 清水文代 杉村文子 中牟田サカエ

吉岡員代 吉岡竹子 吉岡蓮枝 吉岡アヤ子 西納テル子 能美ヤエ子

整理作業：熊埜御堂和香子 林山紀子 小森佐和子 土斐崎つや子 大石加代子 太田順子

堂岡晴美

II 位置と歴史的環境

原遺跡群は早良平野の室見川中流東岸に位置する火山灰台地上を中心に立地する。遺跡内では縄文時代～近世に至る遺構が検出されているが、ここでは弥生時代前期を中心概観してみたい。台地の西側の1次調査では包含層や杭列が見られ、初期水田の可能性がある。また南端の3次調査区でも多量の遺物が出土している。原遺跡群の台地部周辺の低湿地に広い範囲で初期

水田が営まれた可能性を示唆している。これに対し、前期の集落については不明な点が多い。今回住居跡や貯蔵穴が見つかり、台地南側に集落があったことが判明したが、前期集落の様相把握は、今後の課題といえよう。中期集落は北端調査区付近で見つかっており、この付近がひとつの中核であったことがわかるが、西側へかなり外れた10次調査地点では中期初頭の土壌が、また遺跡群の南西端に近い9次調査区でも中期中ごろの住居跡が見つかっており、生活域がかなりの範囲に広がったことがわかる。前期の墓地は未発見であるが、今回でも甕棺の可能性有る破片が出土しており、また南側に位置する12次調査区でも前期末～中期の甕棺片が出土している。中期の甕棺墓地は、北側の8次調査区で検出されている。



Fig. 1 原遺跡群調査地点位置図 (S = 1:6,000)

III 調査の記録

1 概要

調査区は、原遺跡群の台地部南端に近い位置に立地する。遺構検出面は八女粘土の再堆積層である。表土下に堆積する近世以降の遺構面までを重機で除去し、その下の地山面で弥生前期～近世にわたる遺構を検出した。

弥生時代～古墳時代の遺構には、貯蔵穴4基、住居跡2基、掘立柱建物1棟以上、ピット等がある。貯蔵穴は長方形、方形で、前期後半のものである。住居跡も同様な時期のものであろう。中世～近世の遺構には掘立柱建物4棟以上、井戸2基。上墻、ピット等がある。中世後期の遺構が多いようである。

2 弥生時代、古墳時代の調査

(1) 住居跡 (Fig. 3、出土遺物Fig. 5、6)

住居跡は2基検出した。いずれも小規模なものである。

住居跡30は南北約3.2m、東西2mの隅丸長方形を呈する。壁の残りはきわめて悪く、残りの良いところでも20cm程である。長軸主軸上にピットが並んでおり、2本柱と考えられる。Fig. 5-7は住居跡30出土の甕口縁部である。U縁端部全面に刻みを施す。住居跡75は隅丸長方形を呈する。壁は20m程残存する。主軸上にピットがあり、これを主柱穴とすると東西約4m、南北2mに復元できる。床面から石斧が出土した。Fig. 6-7は大型蛤刃石斧である。基部と刃部を欠く。玄武岩製である。

(2) 貯蔵穴 (Fig. 3、4、出土遺物Fig. 5、6)

土壤のうち長方形、方形で定型化しており、弥生時代前期の遺物が出土したものと、貯蔵穴と判断した。4基検出しているが、土壤32(近世)に切られる土壤31、33も貯蔵穴の可能性がある。貯蔵穴25は一辺1.5m程の方形を呈する。深さは30cm程である。Fig. 5-1、2、4が上墻25出土の土器である。1はかなり上位で出土した。口縁部はつよく外側へ屈曲し、端部全面に刻みを施す。2は壺の口縁部である。口縁部と頸部の境界には沈線をめぐらす。内外面ミカキ調整されている。4は刻目突帯文系の甕である。貯蔵穴15は東西1.5m、南北2.2mの長方形を呈する。深さは20～30cm程残る。遺物は出土していない。貯蔵穴18はやや小型で、東西1m、南北1.3mの長方形である。深さは20～30cm程である。遺物はみられなかった。貯蔵穴47は南北1.8m、東西1.2mの長方形を呈する。深さは20～30cm程残る。Fig. 5-8は貯蔵穴47出土の甕口縁部である。外面はハケメ。この他遺構内に示した甕が出土しているが、胴部片で図示できなかった。

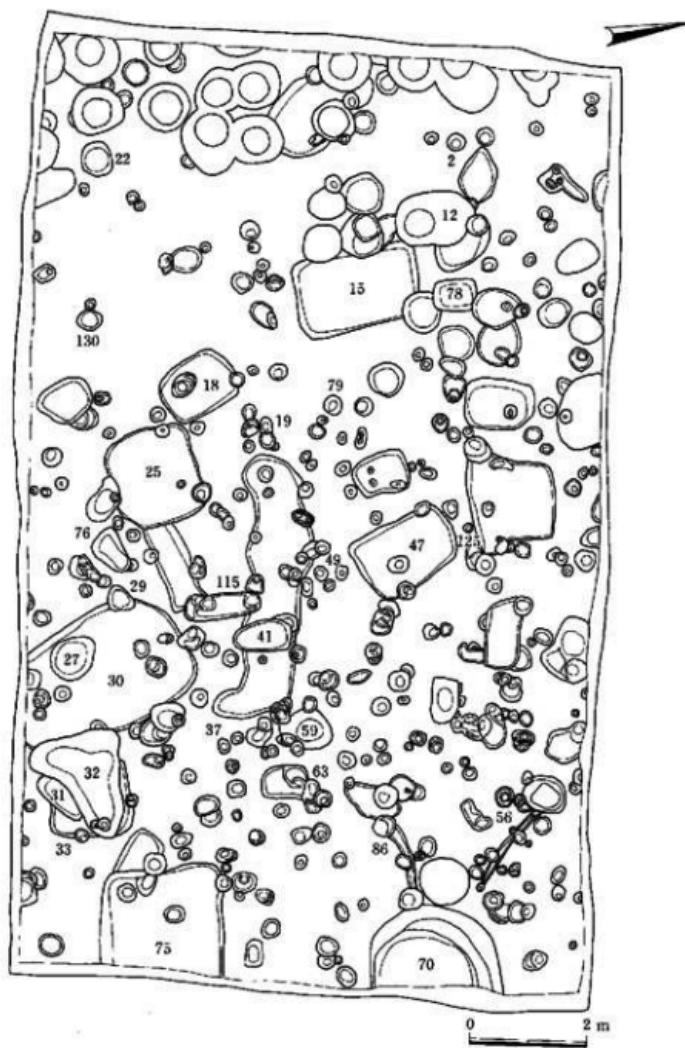
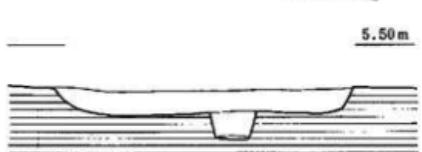
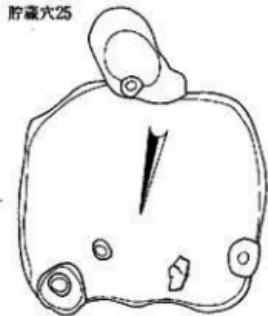
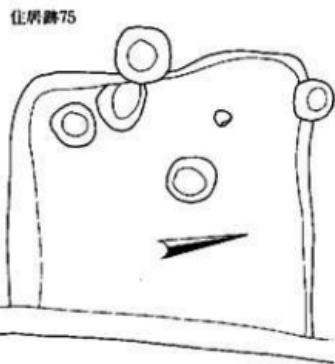
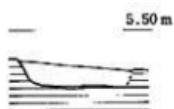
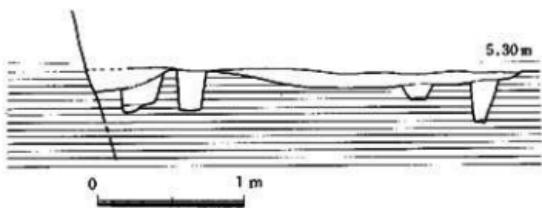
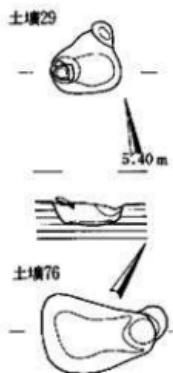
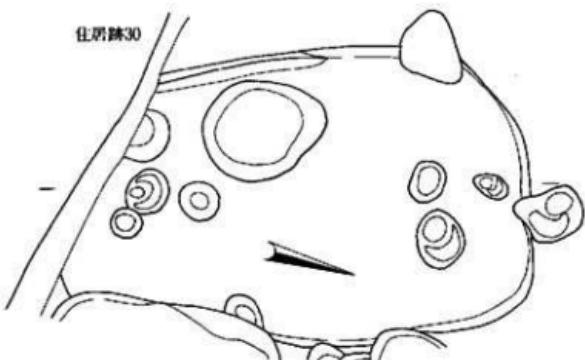


Fig. 2 造構配置図 ($S = 1:100$)



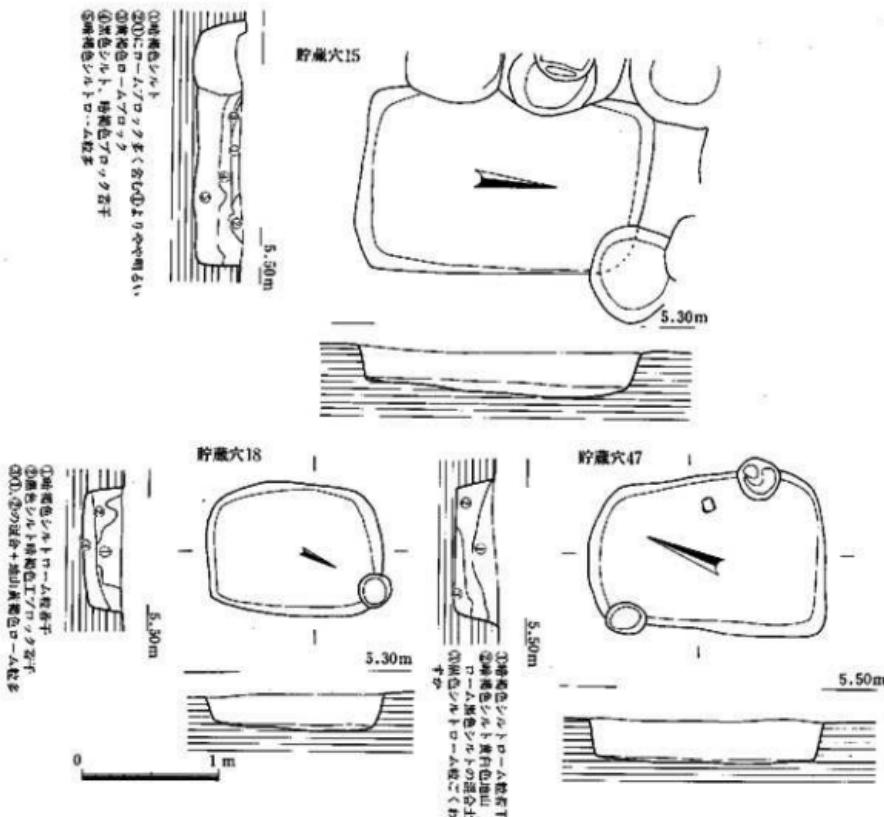


Fig. 4 新生時代・古墳時代遺構実測図 ($S = 1:40$)

(3) 土壙 (Fig.3、出土遺物Fig.5、6)

土壙のなかで特徴的なものを報告する。土壙29は住居跡30を切る小型の土壙である。上位からではあるが、高環状部が出土した。Fig. 5-3 がその高環である。古墳時代前期のものであろう。土壙76は梢円形を呈する小型の土壙である。Fig. 6-3 の柱状片刃石斧が出土した。基部をわずかに欠くが本来の長さと考えて良い。但し、主軸方向にはほぼ中央から三分されている可能性がある。

(4) 据立柱建物 (Fig. 7、出土遺物Fig. 6)

弥生時代と考えられる据立柱建物を1棟確認した。5号据立柱建物は柱間1.8~2mの1間×1間の建物である。貯蔵穴18、25を切る。各柱穴の規模は、径30~50cm、深さ30~70cm程度である。Fig. 6-2 は北西のピット129出土の扁平片刃石斧である。かなり研ぎりして変形して

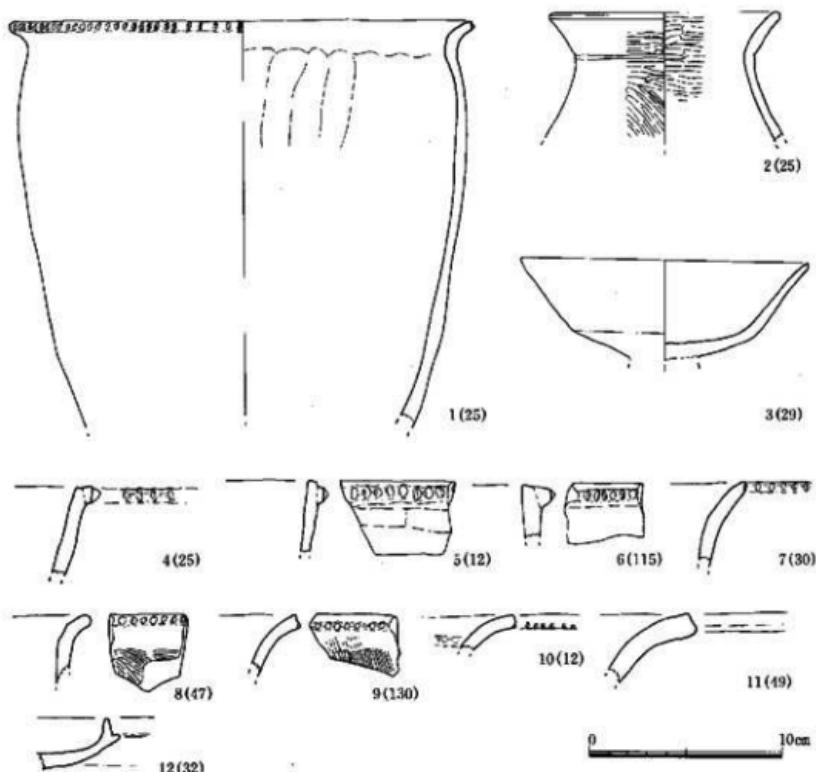


Fig. 5 弥生時代・古墳時代遺物実測図(1) (S = 1:3)

いる。4は南東のピット24出土の土製紡錘車である。径4cm、厚さ1cmを測る。出土遺物と切り合いから、弥生時代前中期以降と考えられる。

(5) 弥生時代、古墳時代の遺物 (Fig. 5、6)

その他の弥生、古墳時代遺物をまとめて記す。Fig. 5-5、10は近世墓12の覆土中出土の甕である。5の外面は板状工具による擦過である。10の甕は口縁部下端のみに刻みを施す。6はピット115出土。口縁部上端に突帯を貼付する刻目突帯文土器である。9はピット130出土の甕。刻みは下端のみに施す。11、Fig. 6-1はピット49出土である。11は中期の甕であろうか。Fig. 6-1は弥生時代前中期の大型甕である。口縁部上下端部にそれぞれ刻みを施す。Fig. 5-12は近世上塙32出土の須恵器である。6世紀後半～7世紀代であろう。

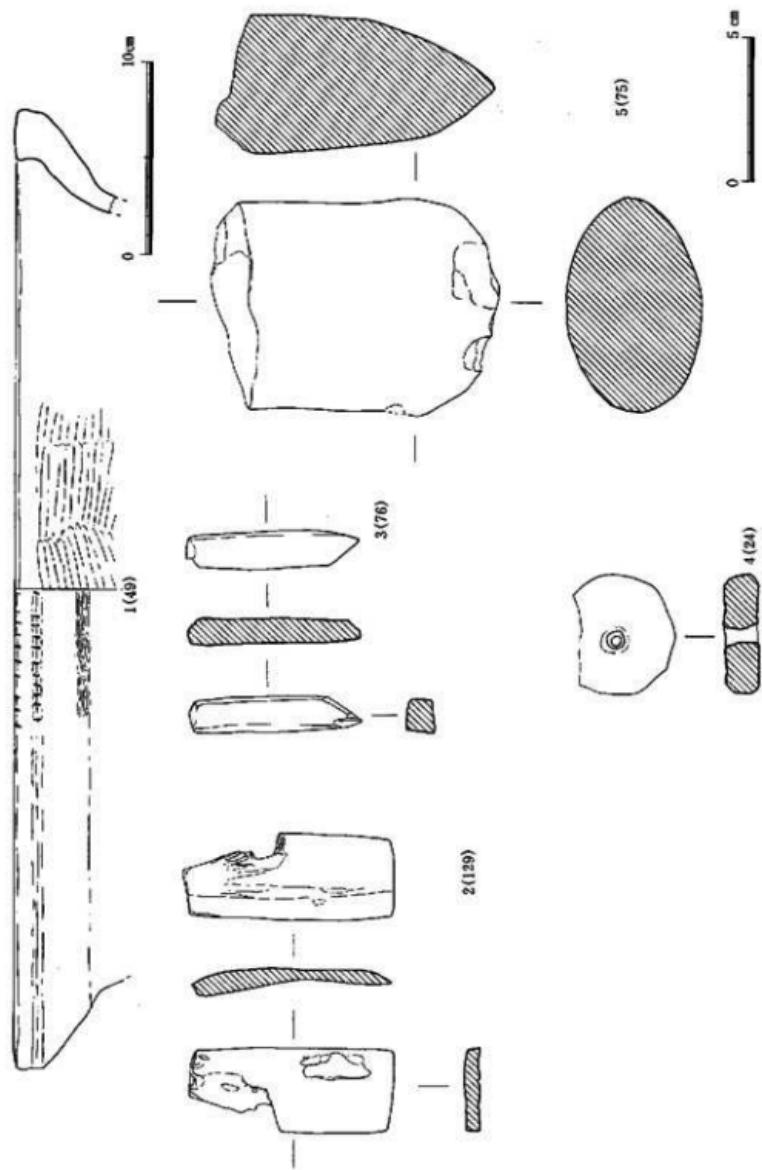


Fig. 6 弥生時代・古墳時代遺物実測図 (S=1:3, 1:2)

3 中世～近世の調査

(1) 据立柱建物 (Fig. 7 出土遺物Fig. 9)

中近世と考えられる据立柱建物は4棟確認した。この他にも多くの柱穴があり、詳細に検討すればまだ増えるであろう。

1号据立柱建物は調査区の北東側で検出した。北側が調査区外である。3間×2間以上の建物である。柱穴の規模は径20～40cm、深さ30～50cmである。柱痕跡の径は15cm程度である。

2号据立柱建物は、1号建物の南側に位置し、1号建物を切る。2間×2間の建物で、総柱になる可能性もある。柱穴の規模は径30～40cm、深さ40cm程度である。東側中央のピット62には土師皿が3枚伏せておかれていた。廃絶に伴う祭祀であろうか。Fig. 9-1は北西隅のピット120出土の土師器小皿である。口径6.2cm、底径4.4cm、高1.2cmを測る。2は南西隅のピット113出土の土師皿。復元口径9cm、底径6cm、高1.6cmを測る。3～5がピット62出土の土師皿である。3は口径10cm、底径7cm、高1.5cm。4は口径10cm、底径6cm、高2cm。5は口径10cm、底径7.5cm、高1.6cmを測る。

3号据立柱建物は調査区南側で検出した。2間×1間以上の建物である。柱穴の規模は、径20～30cm、深さ20～40cmである。西側のピット107からは、小皿1枚、上師皿4枚が出土した。2号建物ピット62と同様廃棄に伴う祭祀であろう。Fig. 9-6～10がピット107出土の土師器である。6は小皿。上げ底状になり浅い。口径6.5cm、底径5cm、高1cmを測る。7～10は土師皿である。2号建物ピット62の土師皿と比べると11径が大きく、直線的に大きく聞く傾向がある。7は口径11.4cm、底径7.2cm、高2.3cm。8は口径11cm、底径6.4cm、高2cmを測る。9は口径11cm、底径7cm、高2.2cmを測る。10は体部がやや丸味を帯びる。口径11cm、底径7cm、高2.5cmを測る。

4号据立柱建物は2号建物の西側に位置する。やや南北に長い2間×2間の建物である。柱穴の規模は径15～30cm、深さ15～25cmと小規模である。

(2) 井戸 (Fig. 8 出土遺物Fig. 9)

井戸は2基検出した。いずれも中世以降と考えられる。

井戸70は調査区東端で約半分検出した素掘の井戸である。径2.2m程度の円形を呈する。深さ1.2m程度で疊層に達したので、このレベルが底と考えられる。覆土は西側から流れこんだような状況を示している。Fig. 9-14～16が井戸70の出土遺物である。14は土師器小皿、15は白磁、16は白色の釉調の施釉陶器である。体部上半のみに施釉される。口縁部下に沈線をめぐらす。

井戸27は径70cm程度の円形の素掘の井戸である。深さは1m程度である。遺物がなく時期不明であるが、覆土から中世以降と思われる。

(3) 土壙 (Fig. 8 出土遺物Fig. 9、10)

土壙のうち特徴的なものについて報告する。土壙50は東西1.3m、南北0.6mの長方形の土壙

である。深さは10cm程で極めて浅い。土壤中央やや北側から鉄刀が出土した。墓の可能性も考えてよいかもしれない。Fig. 9-25が土壤50出土の鉄刀である。茎部を若干欠くようである。剣身部は長24cmを測る。鋒化が著しく闇の形状などはまったくの推定である。脊の部分も鋒部で丸くなるため平面形は鉄剣のようである。

土壤59は径80cm程の円形で、浅い皿状を呈する。深さは20cm程である。覆土中から瓦質土器の口縁部片が出土した。Fig. 9-11, 12が出土遺物である。それぞれ外面にスタンプ文を施す。

土壤41は東西1m、南北0.5m程の長楕円形を呈する。深さは15cm程で極めて浅い。北西隅の床面から土師皿が出土した。Fig. 9-13が出土遺物である。底部片であるが、底径6cmに復元される。

土壤22は径60cmの円形を呈する。深さは20cm程である。覆土より、肥前系磁器の碗2点、皿1点、紅皿1点および土師皿1点がほぼ完形で出土した。調査区西側に集中する近世豪格墓地

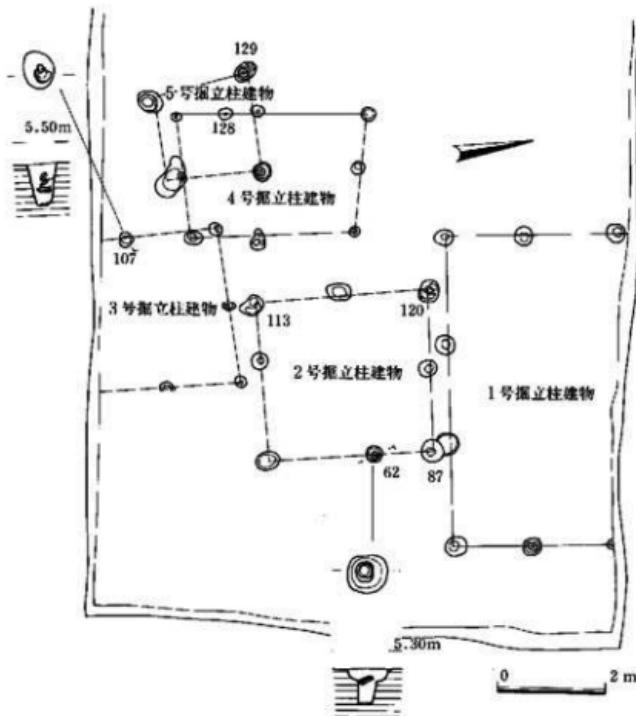


Fig. 7 据立柱建物配置図 ($S = 1:100$)

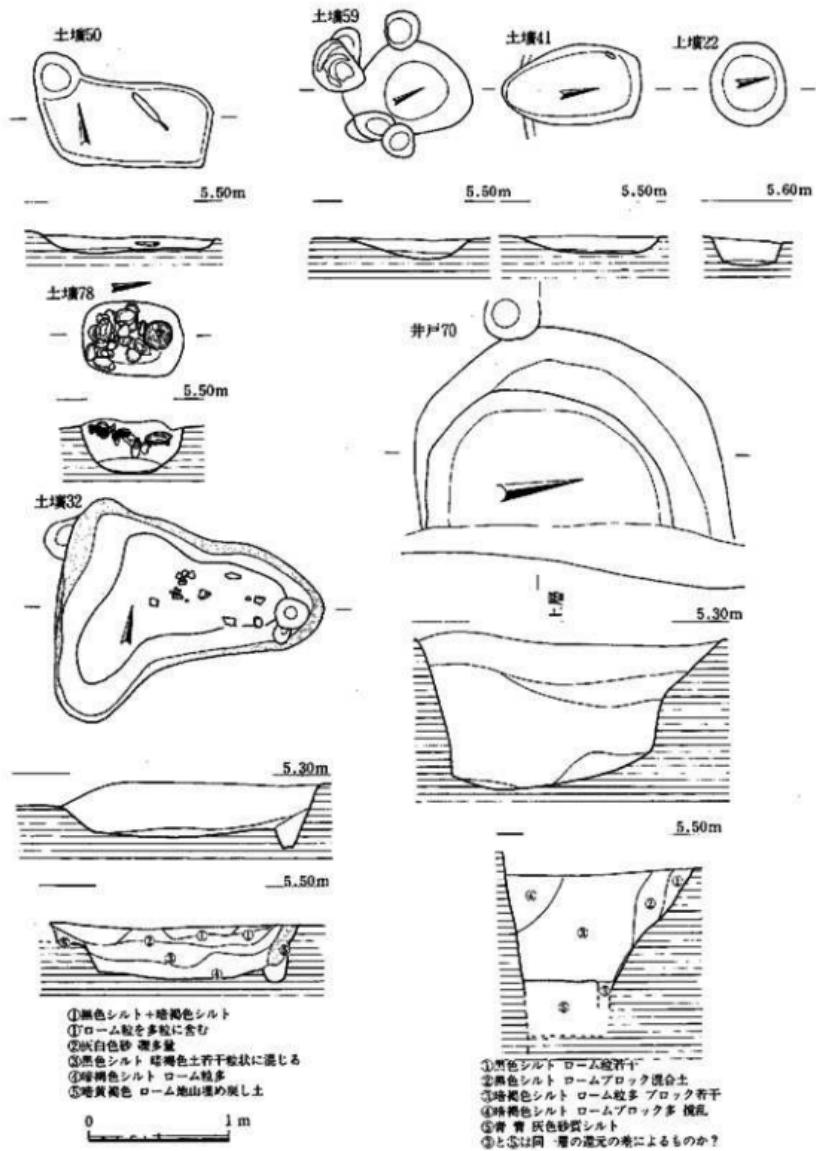


Fig. 8 中近世井戸・土壌実測図 ($S = 1:40$)

群に関係する遺構であろう。Fig.10-1～5が出土遺物である。1～3は染付である。1は菱形を早する皿である。口縁端には鉄錆を塗る。内外面に唐草文を描く。見込みにはコンニャク印判で五弁花を施文する。裏銘には二重方形枠内に「福」の草書体を書く。2、3は碗である。3は2に比べてやや大型である。3の裏銘は「大明年製」の崩し字と思われる。4は白磁の紅皿、5は土師皿である。全体に丸みを帯びた器形である。口径8.5cm、底径5cm、高2.3cmを測る。これらの陶磁器の特徴からは、肥前系磁器編年の中期（1690年～1780年）に位置付けられる。

土壤78は、長70cm、幅50cm程の隅丸長方形を呈する。深さは30cm程である。底面からやや浮いた状態で、多数の礫と摺鉢、火舎の脚部が出土した。Fig.10-7は摺鉢である。上半部を欠く。内面のスリメは2段以上施す。厚く高い高台を持ち、高台外端部には刻目を施す。近世のもものであろう。

土壤32は、調査区南端で検出した。東西2m、南北1.3mの隅丸三角形を呈する。深さは40cm程である。壁には地山と同じ土を張りつけている。また上層1～2層は礫や地山ブロックを多く含む層で、人為的な埋め戻しが考えられる。3～4層も、地山ローム粒を多く含み、埋め戻された可能性がある。床面から遺物が出土している。Fig.10-9は土壤32出土遺物である。陶器の甕で底径22cmに復元される。

(4) 中世・近世の遺物 (Fig.9、10)

その他のピット、掻乱等から出土した中近世遺物をまとめて記す。実測可能な遺物はほとんどこれがすべてである。

Fig.9-17はピット79出土の土師器小皿である。高1.6cmと比較的深い。18、19はピット86出土である。18は土師皿である。口径9.4、底径7cm、高1.5cmを測る。19は土師器小皿である。口径7cm、底径5cm、高1.2cmを測る。20はピット63出土の土師皿である。口径11cm、底径7cm、高2.2cmを測る。21はピット54出土の土師器小皿である。口径8.6cm、底径6.5cm、高1.2cmを測る。22はピット53出土の土師器小皿。やや上げ底である。口径8cm、底径6cm、高1.2cmを測る。23は須恵質の釜の口縁である。24は瓦質土器で、直立する単口縁である。外面に煤が付着する。Fig.10-6はピット56出土の砥石である。両面とも砥面に使用されているうえ、各側面にも研磨痕がある。9はピット2出土の唐津系の施釉陶器である。暗灰緑色に発色する。10、11は掻乱坑出土の陶磁器である。10は唐津系の施釉陶器であろう。淡灰緑色に発色する。11は白磁である。12はピット37出土である。李朝の粉青沙器の胴部片であろうか。灰緑色の釉調である。描かれた文様は鳥であろうか。

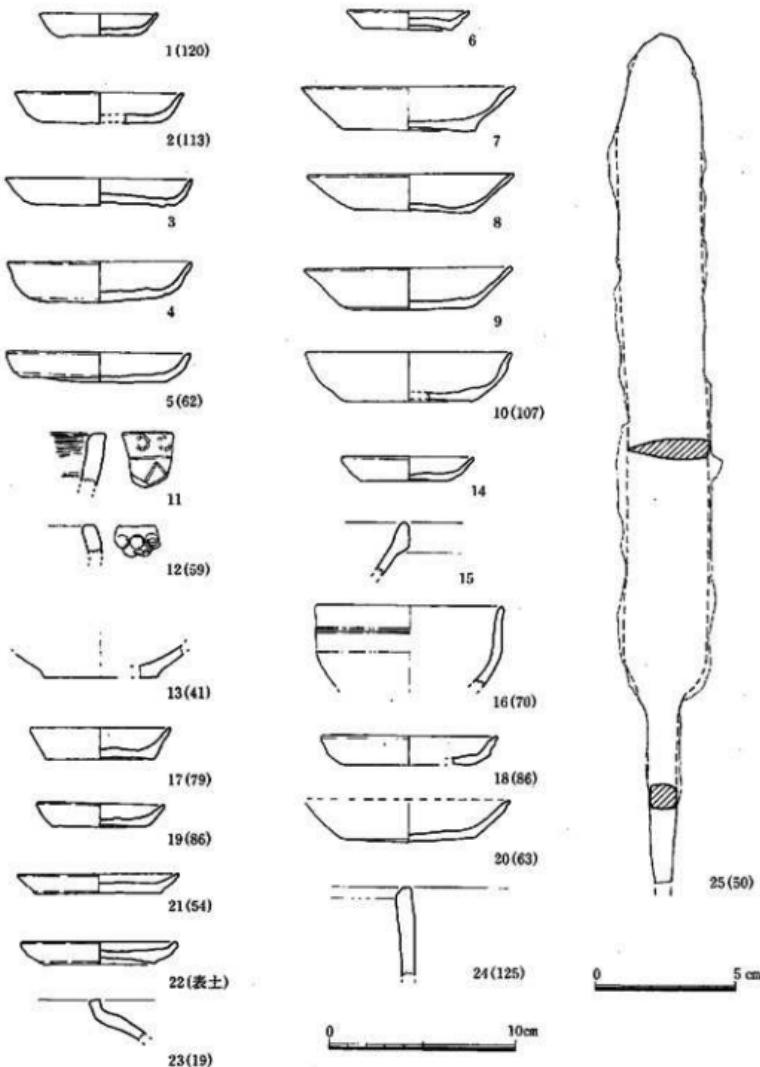


Fig. 9 中近世遺物実測図(I) ($S = 1:3, 1:2$)

4 まとめ

今回調査では弥生時代前期住居跡、貯藏穴、掘立柱建物からなる集落と、中近世掘立柱建物、井戸、土壤からなる集落が検出された。中近世の集落については、調査地である医王山宝樹院

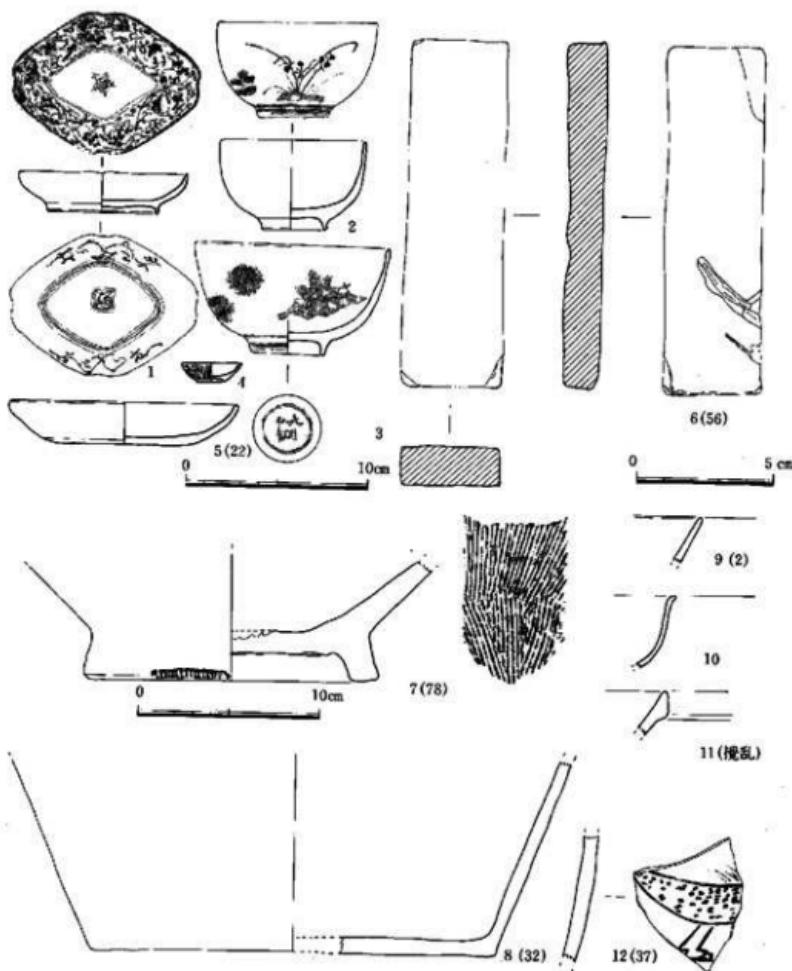


Fig.10 中近世遺物実測図(2) (S = 1:3, 1:2)

との関係を明らかにする必要があると考えられるので、以下それについて述べてみたい。

検出された遺構は中世末15~16世紀ごろと考えられる1~4号掘立柱建物、井戸70等集落関係と、土壙22、78、32等近世でも中期以降と思われる遺構とが有る。この他近世以降に属する遺構で、期間の関係から調査ができなかった墓群があり、近世土壙はこの墓地関連の遺構の可能性がある。細かい時期比定は業者の力量を越えるが、大きく中世末=集落→近世=埋葬という流れを考えておきたい。

さて次に医王山宝樹院の開基であるが、近世地誌類を見ると、まず「筑前国統風土記」本編には記載がない。次に書かれた「筑前国統風土記附録」早良郡原村の条には「醫王山藥王寺と號す。福岡極樂寺に屬せり。昔此地に廢寺ありしを、いつの頃にや行譽といふ僧其跡を引て建立す。行譽は正徳年中に寂せり。」とある。また宝樹院から直接伺ったところによると、寛永元年(1624)に行譽和尚によって開基されたとの教示をえた。同様の記述は「早良郡誌」原村寺院の項にも「淨土宗宝樹院 当院は原字上方にあって醫王山藥師寺と號し、淨土宗鎮西派に屬している。もと真言宗なりしが寛永元年僧行譽入て改宗した。本尊藥師如来の像は傳教大師の作と言ひ傳えている。」とある。寺伝によれば淨土宗改宗以前の寺号を薬師寺としていたとのことで、現在では本尊は阿弥陀如来であるから、改宗に際し、寺号も改めたものであろう。改宗の時期は最も古い記録である附録では『いつの頃にや』と不明とされているが、宝樹院が属していた極樂寺の開基は慶長年間で、天啓、行明という僧が関わっており、行譽と法統上の関連が想像できる名前である。したがって、寛永年間の開基というのはほぼ信用できると思われるが、寛永元年(1624)に寺を開いた行譽が、附録によると正徳年間(1711~1716)に寂とあるのは、いささか長命にすぎないと思われ、疑問である。「筑前国統風土記拾遺」には「開基の僧を行慶といふ。正徳中に寂」とあり、附録とは異なる開基僧の名を伝える。従って附録、拾遺間に開基した僧と正徳年間に入寂した僧(該期の住職か)の混亂があると見られるので、上限を寛永元年、下限を正徳元年以前とする概ね17世紀後半期に、開基の時期を考えておきたい。

したがって検出した遺構のうち、近世に属する遺構は、埋葬に関連すると考えられる遺構があること、特に土壙22出土の肥前系陶磁器はIV期の特徴を持ち、17世紀末~18世紀後半に位置付けられることから、近世寺院としての宝樹院に属する遺構であると判断される。問題は中世末の掘立柱建物群を中心とした遺構群であるが、先述した史料には宝樹院の前身としての真言宗の薬師寺なる寺の存在を伝えている。しかし出土した遺構、遺物からは寺院跡を示すものは見られない。むしろ一般の集落を思わせる遺構、遺物であるといえよう。位置が多少異なるのか、あるいは規模が小さかったのか、周辺の中世遺跡の調査が進むまで、今後の課題といい。

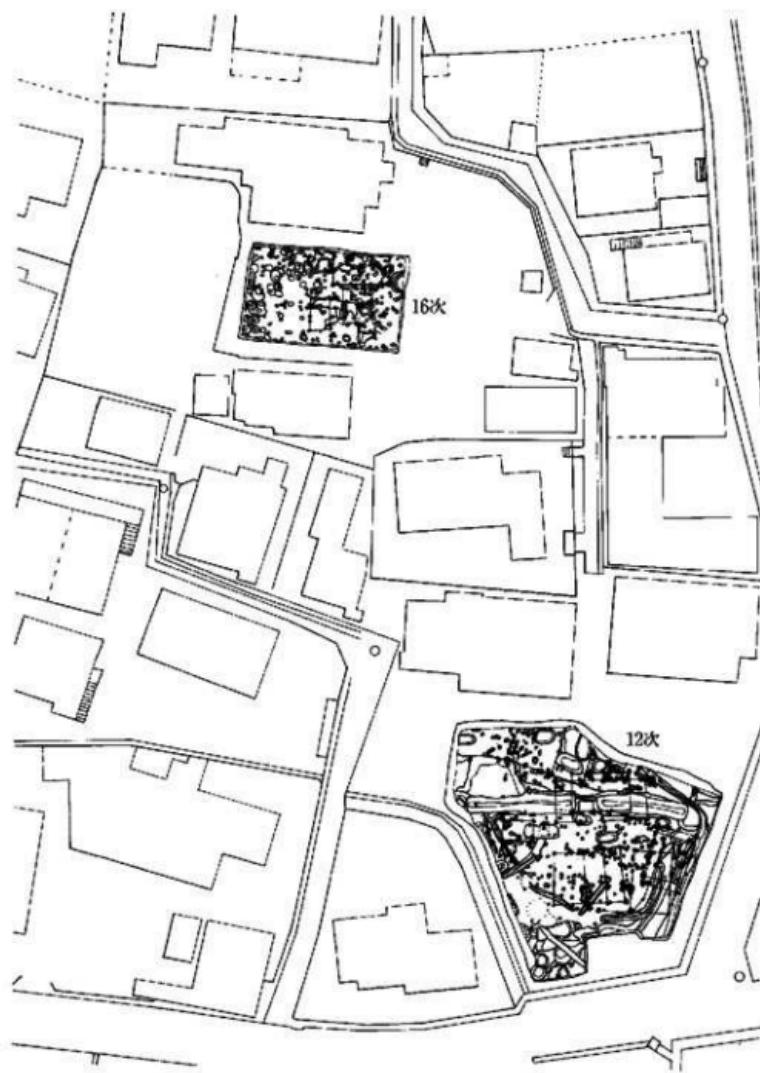
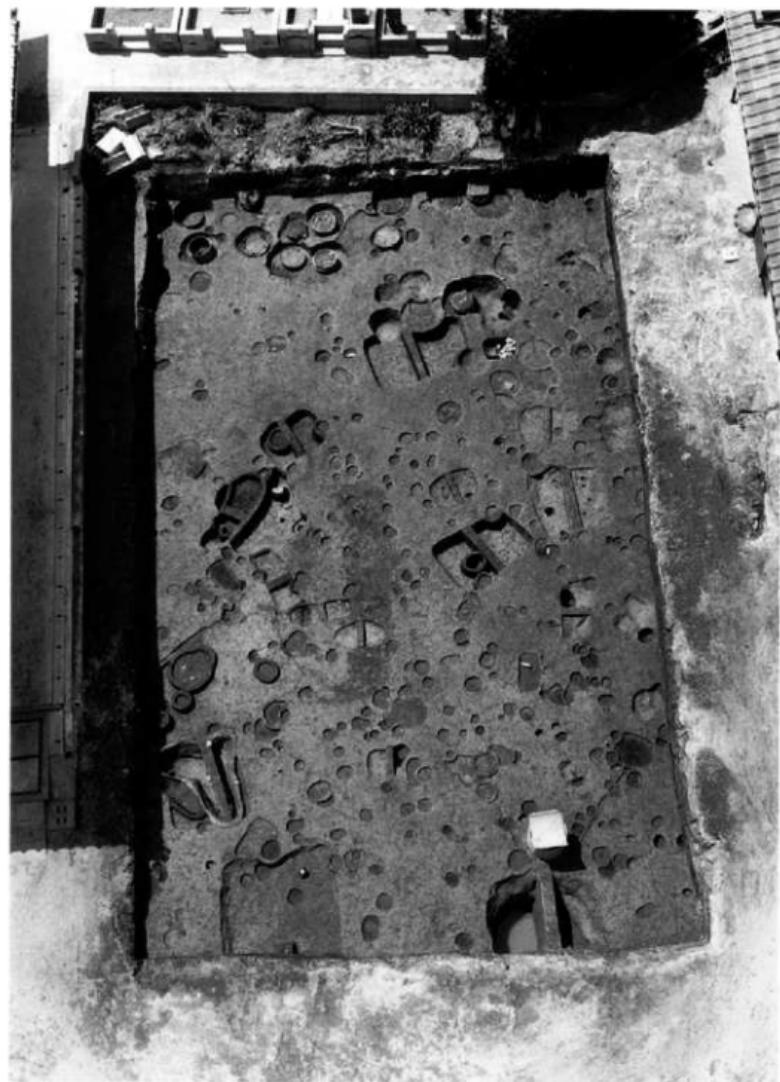


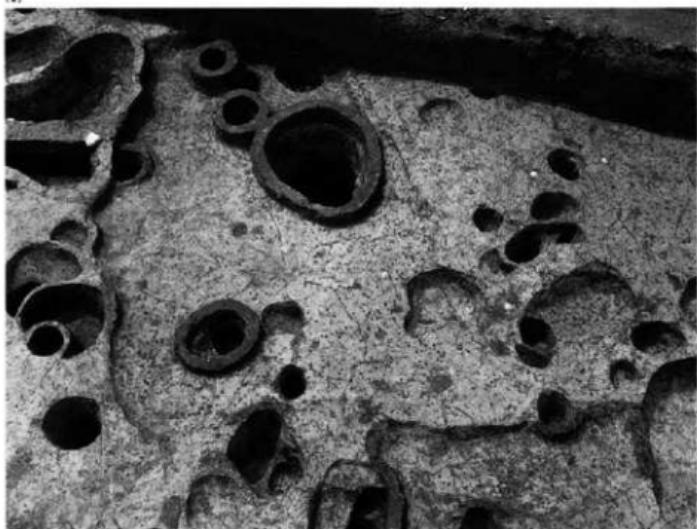
Fig.11 12次、16次調査の中近世遺構 ($S = 1:600$)

図 版

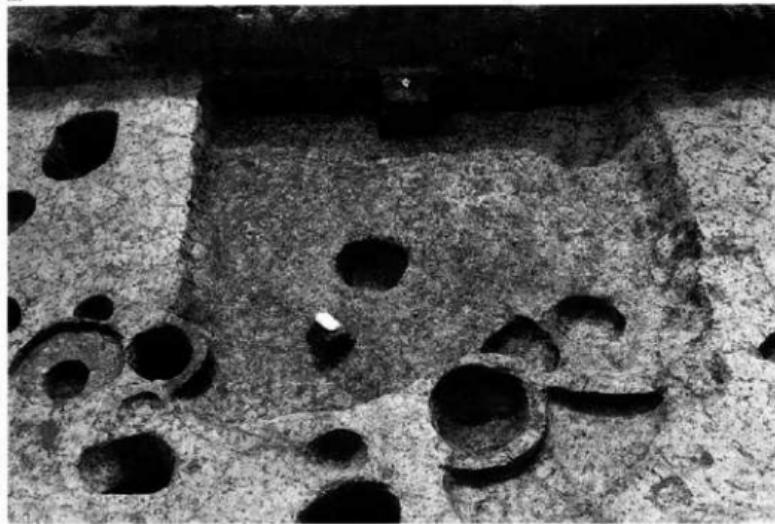


調査区全景（北から）

(1)



(2)

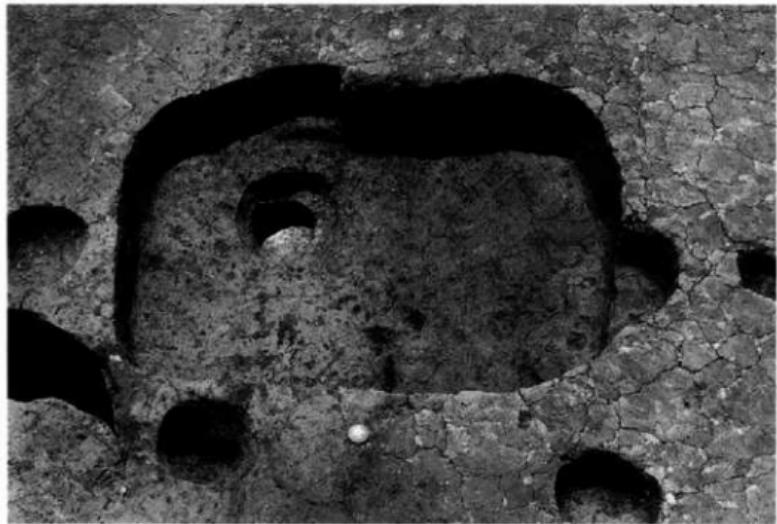


(1)住居路30 (2)住居路75

(1)

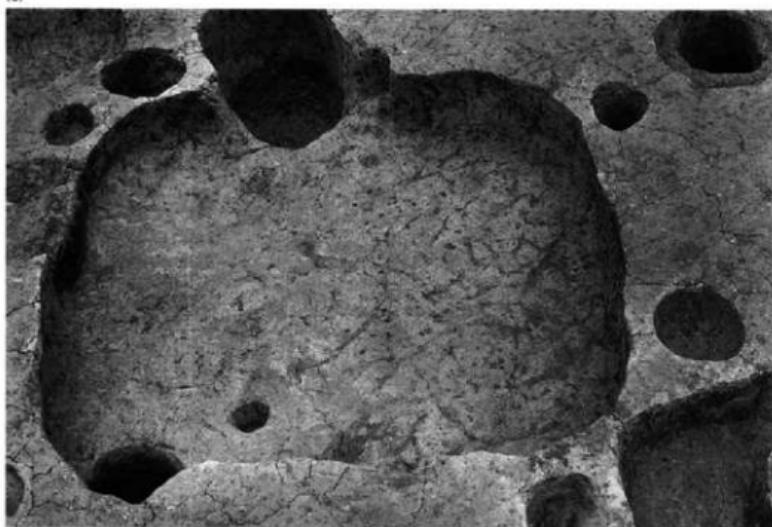


(2)

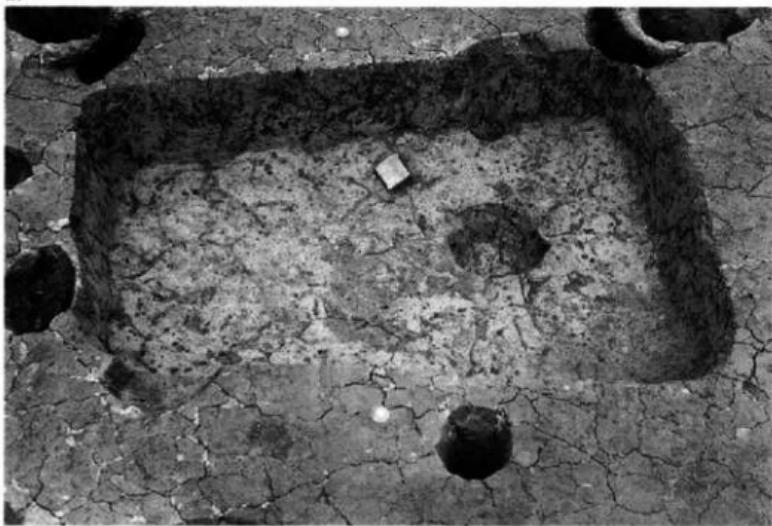


(1)貯藏穴15 (2)貯藏穴18

(1)



(2)



(1)貯藏穴25 (2)貯藏穴47

(1)



(2)



(1)土壤29 (2)井戸70

(1)



(2)



(1) 2号掘立柱建物ビット62 (2) 3号掘立柱建物ビット107



掘立柱建物群

原 遺跡 7

福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集

1993年3月15日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 アド印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南5丁目20-30
(092)472-4736

